

太宰府天満宮の雨乞い祈禱

祈禱とは、神仏に願い事を告げて祈る儀式のことです。江戸時代の太宰府天満宮でも、藩や大庄屋、それに「寸志祈禱」とよぶ社中からの要請で雨乞い・止風・悪病払いなどの祈禱が行われていました。なかでも、雨乞い祈禱による水の定期的な確保は領主層の重要なつとめであり、福岡藩では宮崎・太宰府・宝満・雷山・田島（宗像）の五社が雨乞いの祈禱所となっていました。湯水時には藩の寺社方から天満宮に雨乞いの要請があり、大般若経や法華経の読経を中心とした祈禱が行われましたが、これで効験がない場合は雨乞いの秘法をもつ天満宮華台坊の水瓶祈禱が命じられました。

水瓶祈禱は、四王寺山の一峰水瓶山（岡見山）に埋められた雨壺を掘り出してこれに清水を満たし竹や麦藁で形作った龍を山上にあげて祈禱を行うもので、これで雨が降らない場合には華台坊は辞職せねばならないほど重い役目となっていました。江戸時代の水瓶祈禱は、慶長17（1612）年から嘉永6（1853）年までの間に計13回行われたことが確認されていますが、これには水瓶祈禱を命じられても興行する前に降雨があったため取りやめとなった場合も含まれています。

このうち、天保5（1834）年の水瓶祈禱については「岡見山雩水瓶御祈禱



記（ひがき松垣文庫）という史料が残されています。天保5年7月23日に「雨遠につき御國中雨乞のため」7日間の水瓶祈禱が藩より命じられました。修法のための小屋掛けがなされ、祭壇には数多くの供物が並び、木製の雨龍が作られて水瓶山まで運ばれました。開闢（かいはく信仰の地としての山を開くこと）日の7月28日、華台坊は水色素絹の衣帯・帷子・中啓の姿で出勤し延寿王院ら総社家がそろった上で巳ノ上刻（午前10時ごろ）から祈禱を始め、酉ノ上刻（午後5時ごろ）に雨が降りました。通常、降雨があると古格に則った結願の儀の報告が延寿王院に届けられることになっていたので、翌29日に結願の旨を申し入れましたが、「文化2（1805）年の水瓶祈禱の折にも少しの降雨で結願を藩に申し出たら御國中すべてが潤うように祈

禱せよと命じられたので、最初の定め通り7日間行うように」と返答がありました。華台坊は水瓶祈禱を続け、2日目・6日目・7日目にも降雨があり、7日目で結願となりました。こうした大がかりな祭礼儀式には多額の費用と人足が投入されることとなったでしょうが、国内で最も効験のある雨乞いとして知られた水瓶祈禱はその役目を果たし切ったと言えるでしょう。